



八代傳九輯下悽下中篠舟評五

1冊
600
7074



三四六回



門僧
600
卷 74



八犬傳第九輯下帙下中編愚評略

簡端或說教贅辨いづきも至當の高論也
再三よむ愉快なり已小老練小いそりてい
まはしく精しく十二分小せざるゝとあるが
うらやむべきところなり詩歌とて下りその外
藝小達せし人も凡八九分よめられるまは
十分小いゝまはる藝云々今世地と云らるゝ
先生の著作の自誇ことわりを感心する小
と云り又京師のことの十數回云この論も志
これゆき評卷ことの外大なるまはる水滸の

例と引用せらるるもの多く六七分のことを評
はる予が目やも然然と云ふされと元來安房一玉
とりとる物語を洛陽小おぼえんこと所謂
千里獨行ともいふべき掃色とむねよめて一
筆力なるといふ企おぼえぬことあるべしと感ぜ
小あまりありさて怪談ののここと云ふこといふれ
るもことわりあきとらるるいふもの詞のごとくなれ
怪談小おぼえんといみさるる御家小あは平生
好くともいふものあはしとこひそく小一英とるま
のこ本傳のうへにその怪談鬼話もいさうとむね

詞なる一は或説への俊寛嶋物語と云ふ評せ
しるふりの詞と難せられぬものとよりるものと外
は自向自答るるべし看官小鎗とられさせしもの
門をすし用心堅固の門家なるうへ

百四十六回

腰餉と紀二六の分とすやあらん云ふこれらひるる
の作者の氣のつらぬとあるるべしことよく心づか
例のごまうし當分の分小あまりあるるとる自
然のことし

不知安房内なる太山路の云ふ山路夜行のこまを

みるがごとし

鮮血とらうたなぐまこと地獄の畏とるせふ
んうられるの新奇

姫神傳授の神薬又もろぎふ出されり姫
のふふ出されるの子細るけまど兩悪僧のふふ
用ゆるふうくとそかあつらふつひやえいふうと詞ふ
ことわられる例のぬかあるつのでふふ雪吹姫
は虎嘯風生の意とめて虎ふふりるるるると
つて婦女ふ似つふと字面下つて妙

僧の字は作者の作字り又もり所あるうづま

どうしき字なり

般若檀と又のふとされるも後篇とあ後みど
れはよく本末とのり般若檀は太平記ふ
例あまふとふ意味ふ

兩悪僧と紀二六がえりて白状さる趣向も
ゆとどうと案外やて悪僧の詞ふ我五虎のふ
とあるも前編ふすふ評せ五虎の名詮
むるふとて照應全くと珍重

五百生の其間子るたのふけるふことれいふ
律ととも妖僧のふふりふとあて世人も

志れり妖僧のゆいやくむづ本傳のつひえて志るも
滑靴酒落毛すづく珍重

管領家の恩賜の衣裳武器調度といふもの
さぞ比旨めつくり入りふりともりあつけおきさる趣向
尤妙中て犬士の面目とあつせり宝庫へくるとま
とまひねこの論いとせり五虎と一虎の對句
も上小評せし餘韻珍重

身装の文句唐山小説の但見の凡中て立派なり
安房よりゆきこるもまう一十方の敵とむく
て云飽ませ親兵衛の貫目ありて

談合谷の地理親兵衛が志るべくもあらず地
圖小よりてと八例のぬめり

虎のゆきとらさうくして志るもまふせまりゆと
りぞとこの虎の前回よりして脚色おやく大
場とのぶき所るまの尋常の筆おきさるあ
りの不用の文華とおやく一殆ど景とらむ
こと所謂百日の説法尻ひつとあふ場あつる
ことおろきめのへるるとまふおひかごうくさうくと
文執おせるとくせられるもの老練の脚色あて
他の企おきざうぬこと一走帆小順風の詞も

廿二ウ兵行
メかめさか
ゆきかゆさか
かゆきさやま
り

廿三ウ兵行
行メ人入
ナルベシハ
イカ下モデ
シカケシ

よくとりあひたり骨とけ皮おちりのまこけて一寸
画と虎のさまをことわられぬことよ妙と出の虎の
らぬ風情先説けて妙

百四十七回

四つりとある天然石も自然小出するごとく豆草
のるもうるいそふき中おてぬりあることよ
紀三六が炬火とてうして偶會の趣向も自然のを
くこのときろ武松が虎とてうつ辰のおりげあり
てまうも新奇妙

靈虎が悪人とのまをとりひて善人とをとりひるを
勸懲とてしれたことの前編の評小のりされば親を屠
中むふぶくもあぬことよのりたることよ文よ
勢るく前編より仕その一大趣向むるくも
よりて一理屋あるごとくとて親を屠が河小とて
とことわらせざるよむようまび文小を用ゆるく
まうも勸懲とてしれたことよのり敬服と
鏝とぬとさるて木丸とりてせしを不審なりが
はともちめて疑とちまち氷解例の勸懲たどき
と感するのま

日本魂喜崎の閑路下りたる語の勢妙

ついでにさるもあつていふことありあひたり

大杖入道大津繪の鬼の念佛の意味酒と落こ
いとどう生勇るる角折て云この文句例の妙文
自他の好可を用心ある一とぬと云この句説はて
予ハ作者の用心ある一の作者小あるとぬと
思ふ事して感服と

と虎の画と横幅小画けるいさう遺憾あり
よハ立幅のうことありあひさうと云前編
のさう画あはすで小立幅の雪吹姫の像あ
り古画のありく立幅るう小あがえたり

例の画エのふるさる嘆むべし

代四郎ハ親を来小画會せむ姫とおくして政元小舎
それよりして虎のこと小あり画虎ハ圖中小うあつ
も政元が画幅の箱とありたりなるると事自然
のことく親兵衛代四郎紀三六とも相違の役まり
ありて妙の妙なかけの箱箱と列衣ことを音七
腕小ひささてとりおとらんさうもま小さあつて
勢あり隻耳と刀痕のあり一事ると妙の妙と
いふべくはとらう一大趣向とくさうの箱中小鎮
して評する小筆もあつて奇と妙と

十二下ウ五
行々後ノ
字彼ニテ

この段の政元と曹操小擬する一犬趣向をして
の関羽千里獨行は擬する一条の結とをとり
くもつけられし錦囊は錦袍の翻案するべし
衣服をしていづるまの鈴ともおのひらられるいを奇
るや錦囊をして三國志演義の劫定とあか
さてもめくまれるものるをうつるる驛路の鈴の
ひびきもげし海内の人耳とをとりし妙趣向と
りふべし

百四十九回

石薬師の
薬師院の
照應甚お
もい

今の石部よと云かざる雁南山云々
大野の六地藏るどりよと云何の書よ
ありやれまご志るむせぬの事
石薬師のみちの左小あり右午の字
いささ自らよと云るゆう小おるゆ
良薬苦口樹とあることのとらふ
ささせあふべし
塔婆と文明の年号めえおる
ふくんとりらひらま

石薬師佛前のさぬりまなやうこのかきとり
青磁の香炉もこもめる

方長脚托と宣言の巻之用ひらねる事

自然のことこれ看官のふつらぬ作者の

用心と前文とこといひあはれるとこ小

て感服

宣言と辞なる趣向意味ふうこ又後

編小いりてさあ一太趣向あることん

つひと違勅なるごとくあはれおほはる又

使者と五虎の一人とつらまはるも首尾

前編四虎と
五虎とあは
書ハ列の
ととらせ合
用感つ

とくこのゆりて妙あり五虎ハ画虎の照

應るること前編の評よりの

驛鈴と関符ふりまはるることおほく

去りも首尾とこの下り管領家の物

ハツもりけざること上小評しるが

こと一はまの驛鈴の出所もさうようび

よりとせとて餞りて三玉志のおもげ

るくとおもはるる難儀とこののが

はくことらまはるもかきとり

三関の役人の落着と説仁が仁慈の云て

画虎と
しり西思

編小あたま 説いごあさくらく少て又とき
いご 京師の野邊小似これどもと常房が歌
の文句とりのめう 本末照應すこもみされ
むしとげ小大筆とらご 舊記のほろび
らせ こと今世るま学者の嘆むらひりと
らりるまどと茶碗ツとをさるひ 云ことまど
これ論破せん旦利家の當時の風と想像
すまばさもありえう 今世茶人が茶碗ツと
あがるひりとむるあさひの万巻の書とあがる
よまのさることあり 近來三千金あて
られ茶碗ありこれらの愚人も

この方便とりて濟度しきまの 拙僧あふ
とさるまあり云この論これ今世のまど
らぐちえたり 予が茶人とあむもまどは一事
小あり甚愉快なり

無腫の論小いとりて一段の高論めて書とそ
れども文義とささるまど 義政と無腫虎小
擬せられるも愉快く又心高慢已小惚く
博小らとり俗とあざむささるまのりのあ
ゆい頭上の一針なり 乱と起して刑せらるまど
ハ近世るまど こととらまらるま 林小忌と

くもまぬうけくうきとて人もの志らば亦も
えらば一休が水中の一物と讃せしことと
あひひらぐその詞ととりもあらさずつらき事
もくくまらりたり

偈の文句甚あもくくく無眼之勝有眼人
面獸心なむと尤妙なり

は虎の出所の平妖傳云この例を引て前編
小評せしことくそのとえやもを妙めて心
火中てやとらるる寸と案外の趣向へのを
出し童子るむと又出事のく結とつらるるんと

あひひらぐとめさるるのき奇童のくめ
出し虎と神童力とりてくづめ神僧可
洪度と首尾すくもみますげふ大筆の
看官にあやしく虎と射る段の花やうるる
らぶられど予の虎の因縁と依く感心せり
れば筆小あまのりなりて評しとめさるる例
の妙の妙といふより外なり

一休和尚のくくく合て看官もくくくこと
りとするるむと時代らるる相違せればつら
やくくくこと達への故事るむとむひとてた

くみ小あひさされるいなるく小感ずるところあり
洛外北山やてまこの白川山なる白幽子のこと
と一寸おのいましてゐるうさおいあゝごるり

義政の文盲とあゝととれれる後るまは
故事の小槻雅久あるの某甲僧正茶會の
餘談るどかまゝる作者の用心感服
画虎ハ一休和尚涉度しこれ世上の茶人なま
めりりの学者いなるかこの方便も醉とま
すいまれるまづ作者の老婆心のいづゝある
んい志送憾ありとを嘆ぶるあゝるる

百五十一回

水陸のくくひと習ひせめいこれ後編の志
そのなるまづ一犬士各勇士るまゝと合戦の大陽小
いりていゝ小丹練るまゝと不お癒るまづ
例の作者の用心るる

只音づれと松の戸小蔦紅葉ゆるまゝ例の妙文
あてんづるの文句小月日のうづりゆるまゝを
が老練の文法

獵場小益益の殺生といふあられり例の勸
懲たるといふべし佛氏がみづり小殺生を

のまゝむらも愚く無益の殺生とらむの程思
ことなきとありはこと小敬後

大江親兵衛も今度の獣獵云この後りのごと
こと小妙るやこみけりのぐり小親兵衛もとり小
あるべしと補つて作る作者の用心るべしこと小
後の論と後小をとりまはるぬるあるやとあり
靈芝の事十莖とあるは水滸傳小百十道
とあると翻案せられるべし八犬士の外二人の
うち一人は正木内膳多るべし今一人分明るるぞ
り一口画小んえする千代丸圖書助とありあり

のいあふぐりこいさあてのそ四莖五莖十莖
のみぐりこいさあてのそもえりぐり

穂北の一件よりして云の事のおこるるま自
然のごとく一旦波風るるとさまりし事
物よりわかるるるの事と説出しそれより大
場小のそらんとよるるをこめさつてあみなる
こと感ぜる小あまりあり

蟻屋梨八の谷伊勢物語の翻案あり
一咲こ

えびらの大刀自が偽りの事又ら小て結とつ

られる事ある金とらひて

詩歌の意味いふはよりいふは水陸兩路の大軍の首尾の三国志の赤壁れおもひげあるとあはれ

百五十二回

孔子ある春秋とつらうい作者の士面目芳流閣の事と又引らるるも首尾よくその定正成氏のつても者官のよきりる役者あることふ意味ありしや書けの役者あることおもひて又引らるるが

作者の妙めて鹿茸までもあることと妙筆あるわ山わも里わもつらうけの妙文

百五十三回

八百八人の風なること新奇の風なるの三志の翻案ことふ妙なり
雍尾龍衣の玉と又とりいふこと意外と妙
赤壁の戦風の陣壽が三国志といひて
辨論せられたる確論

大の菴室して毛野犬角が兵海へこれ出たのひきとらういふ作者の用ゆるる

例のぬりあや、大のつらひやうのつらふとおをう
がくくく後編の出板とてうつのも

この百五十一回百五十二回の別小さくく許
するやすくくくく者官の倦もあるけほど
作者の甚難儀のくくく注意の趣向いつりゆせ
るどくくくめて物なくすくく前編とひらくと
さくくくくく筋とすくくくく後編大
場のあくくくく苦心おなくくく容易
小んはくくく予の脚色のつくくく
筆勢するどくくく感心く

上の条々畢竟畧評たりの評

おとせくくくくくくくくくくく
りくくくくくくくくくくくくく
否とせせくくくくくくくくく

十月六日

桂窓

著作堂先生

あや

桂君精評至妙至當無不得正鵠
也雖彼七鶴山亦何加焉賞鑒有

餘不敢多辨但於百五十一回靈
芝事猜評未的然猶待再考而已

著作堂老禿

著作堂

新編金瓶梅第七集拙評

新編金瓶梅第七集畧評

ことどもがわの二百あのかとちさうよよあつてせ
くやうのるをかさうよよあつてせ
をまうべーよめさるのたせうあつてせ
だんえんのふくせんあつてせ
せがらをみるけして木いすがまぐいあつてせ
ほろんとあつてせ
ろー○ひびねがとらのおとあつてせ
ぬこさうあつてせ
この男女の名ちよとあつてせ

此男女よりうらなひかぎ *Prigant* の *Navis* の
らんほうをもつていんちやくもあつらんきんぬ *Prigant* の
二人はとうしの *Prigant* の *Prigant* の *Prigant* の
こそいそえあつていよひおーいんちやく *Prigant* の
そのたちちよび二人よりうらなひかぎ *Prigant* の
○かきんが又ほれ節とたそく *Prigant* の
いよく *Prigant* の *Prigant* の *Prigant* の
とらんぶらぶら *Prigant* の *Prigant* の *Prigant* の
が妻とうご *Prigant* の *Prigant* の *Prigant* の
たれー妻とま *Prigant* の *Prigant* の *Prigant* の

よもそれさうおうよむ *Prigant* の *Prigant* の *Prigant* の
死とまぬえう *Prigant* の *Prigant* の *Prigant* の
のつらひさ *Prigant* の *Prigant* の *Prigant* の
とそれと *Prigant* の *Prigant* の *Prigant* の
○かきんがほれ節と *Prigant* の *Prigant* の *Prigant* の
かよひと *Prigant* の *Prigant* の *Prigant* の
おれ節よ *Prigant* の *Prigant* の *Prigant* の
かるたらと *Prigant* の *Prigant* の *Prigant* の
ふらる *Prigant* の *Prigant* の *Prigant* の
た *Prigant* の *Prigant* の *Prigant* の

あかきりしむしむのそとごはるるるる
のちかむ(あ)そむるるるるるるるるる
るのちむむむむむむむむむむむむむ
とむむむむむむむむむむむむむむ
おとんむむむむむむむむむむむむむ
さむくむむむむむむむむむむむむむ
のちかむるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるる
○むむむむむむむむむむむむむむむ
こむむむむむむむむむむむむむむむ

さあかむるるるるるるるるるるるるる
いくさむむむむむむむむむむむむむ
よろそむむむむむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむむむむむむむ
よむむむむむむむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむむむむむむむ
のほむむむむむむむむむむむむむむ

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged paper.

○ *Handwritten text in a cursive script, starting with a red circle.*

Handwritten text in a cursive script, possibly a continuation of the text on the previous page.

○ *Handwritten text in a cursive script, starting with a red circle.*

Handwritten text in a cursive script, continuing the text from the previous page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical record or account. The text is written on a page with a decorative border at the top. The script is dense and fills most of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical record or account. The text is written on a page with a decorative border at the top. A red circle is visible at the beginning of the first line of text.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written on a page with horizontal lines. The characters are dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the script.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written on a page with horizontal lines. The characters are dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the script.

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十

庚子春三月

後齋



